

街路樹

学力向上に向けて 32

～ “連携”という視点から ～

3月 幼稚園の卒園式 『いつのことだか 思い出してごらん♪
1時間以上にも及ぶ式の間、どの子ども堂々と落ち着いた態度
で式に臨んでいました。』

4月 小学校の入学式 『さくらさいたら1年生 友だちできるかな♪
高学年のお兄さんやお姉さんに手を引かれて、心なしか不安
そうな足取りで入場してきました。』

幼保・小の連携を考えると、ある園長さんは、
『幼稚園・保育園で一番年長の子どもたちは何でも自分でできる
おにいさん、おねえさんなのに、一年生になったら手を引かれて赤
ちゃん扱われて、せつかく伸びてきたものが逆戻りしてしまう。』
つまり、幼保・小の連携を考えると、ここまではできるという子ど
もたちの育ちをわかってもらうための交流がまず必要ではないか。」
と指摘しています。

そこで、子どもの育ちを大事に考えた学級集団のつくり方の工夫を
しているという横浜市立S小学校の取り組みを紹介します。

- 子どもたちが近所同士親しくなるよう、方面別で集団を仮
↓ 編成し、さくら組・たんぽぽ組とクラス名を命名。
- 児童集団の使用教室を固定、2人の教師が週のうち2日ずつ
↓ 交代をした。
- その間、各クラスに臨任、非常勤の教員を配置、複数名で
↓ 集団のようすを観察し、その時点での人間関係などを把握
する。
- 本編成を決定する直前に母体園の保育者にクラス分けをみ
てもらい、助言や育ちのエピソードをいただき、学級編成に
反映する。

<成果>

お互いの教員が、遠く離れていた幼児教育と小学校は実は隣
同士だったことによりやく気づき始めた。

本市小・中学校においても、確かな学力と豊かな心を育てるこ
とを目的に、各校の実情をふまえて、教員による交流授業や児童生
徒の授業の交流、授業をみる会等、小・中の連携を
積極的に進めています。今後、これらの交流が、
校種を超えた教員同士が“子どもの育ちを理解す
る”という意味疎通や共通認識に立って進めてい
くことで、さらに深まりのある連携となっていくの
ではないでしょうか。



新任常勤講師研修会講義より

◆ 子どもとともに教師も育つ ◆

- 1 児童生徒と「共に」と「こまめに」を忘れず日常的に
- ① 朝、教室で子どもを迎えていますか？
 - ② 授業と休み時間を区別していますか？
 - ③ 子どもと遊んでいますか？ ④ ともに清掃していますか？
 - ⑤ 話しかけやすい雰囲気作りに気を付けていますか？
 - ⑥ 明るく元気に声かけていますか？
 - ⑦ 教材研究をしていますか？(教えなければならないこと)
 - ⑧ 放課後に子どもの机をみえていますか？
 - ⑨ 今日、声をかけた子どもとかけなかった子どもを確かめてい
ますか？
 - ⑩ 自分が子どもだった頃のことを忘れていませんか？

授業改善・指導技術 22

～ 説明…授業づくりの基礎技術 その3 ～

説明は授業の中でもっとも基本的な教師の指導の言葉であ
る。説明では、構成や内容をわかりやすくするなどの技術が
駆使されるが、動機付けのコツは、次の2点が大事である。

—心理学者 海保博之著「説明を授業に生かす先生」より—

1 その気にさせる

騒いで聞かない子、注意が他にいつている子、気持ちが集
中しない子にも、耳を傾けさせる方法としては、

- ① 注意を引きつける…声の大きさを変えるなど
- ② 興味・関心を引きつける…簡単なクイズなど
- ③ 趣意説明をする…「これから何のためにどのような話を
するか」話の予告をしてから話す。

2 飽きさせない

説明が単調なほど内容に関わりなく、一定の時間で飽きが
来る。そこで、注意を高める工夫が必要となる。

- ① 具体化をする…「たとえば」を使って話をする
- ② 共通語を使う…子どもの興味・関心のあるジャンル(ア
ニメ、スポーツ、バラエティーなど)のイメージを借りて

学級経営のヒント 21

～ 学級目標や一人一人の目標を達成するために ～

学級の目標は、学校教育目標を学級の実態に即して具現化
したものである。また、学級の目標が一人一人の子どもの目標
達成につながるものが大切である。学級目標や一人一人の目
標を具現化するためには、

- ① 教育目標及び重点目標が具体的にどんなことをねらって
いるかを把握する。
- ② 学級の実態、子どもの願いを十分に踏まえた学級目標に
する。
- ③ 学級目標と学級の活動内容とのつながりを具現化する。
- ④ 具体的に子どもにどのような経験や努力をさせればよいか
学級経営計画の中に位置づける。
- ⑤ 目標達成の状況の評価を計画的に行い、結果を生かす。

2 児童生徒の個を生かすために、教師が返す言葉こそ、授
業づくり・学級づくりにもっとも有効な手段

「なるほど」「おいしい」「さすが」「天才」「よし」「うまい」など

優れた教師は、数値化できないものを外形化することに長けてい
ます。テスト点はいまひとつだが、ある種の可能性を秘めている子に
は「見てるよ」と目配せする。形を変えているいろいろなアイコンタクトを、
ひとりひとりに送ることで、子どもを刺激するのです。授業中のワンプ
レーズで、ひとりの子の顔を見てアイコンタクトを送ると、送られた子
は、「おまえはこれを学んだか」とダメ押しされていると感じる。あるい
は、「優しさと卑しさは違う」と言えば、自分のことかな、と感じる
子がいる。教壇からパブリックなメッセージを送りながら、一人ひとりに
「自分のことかも」と思わせるパーソナルなメッセージを送り続けて
いると、子どもは反応するようになります。(中略)子どもはいつも自
分へのメッセージを渴望しています。教室で子どもたちに「自分のこ
とを言っているのだ」と思わせることができるのが、一番上等な先生
です。「子どもが刺激される上等な先生の条件」内田樹(総合教育技術)